

現場のニーズと課題に応えるミニプログラムの開発

教育臨床講座・藤原 一弘

1. 授業の基本情報

本授業は、大学院教育学研究科(教職大学院)1回生以上を対象として設置・開講されており、本学部・白松賢教授とのオムニバス形式で実施している。今年度は教育実践開発コース・教科領域コースに所属する1・2回生7名が履修した。本報告では、筆者が中心になって担当した回に関する授業についてのみ記載する。

本授業では、現在の学校教育現場で課題となっている事象や、現代社会を取り巻く状況に関して学校教育で取り上げる諸問題について、未然防止あるいは意識啓発、行動変容を促すような教育プログラムを計画・立案できる資質・能力を育成することを目的として開講されている。今年度、筆者は次の2点を強く意識して、カリキュラムを編成・実施した。

一点目は、より実際の学校現場のニーズや課題を取り込んだ内容にすることである。とはいえ、現在の学校現場は、「カリキュラム・オーバーロード」が指摘されるほど、児童生徒に過重な負担を強いる「内容」と「量」を課していることに対しての批判が大きい。加えて、教員自身の「働き方改革」に対する意識も高まり、研修については、その質とともに在り方・実施方法自体についての議論が活発になっている。このような状況下で、正直なところ新たな取組を取り入れる余裕が学校現場にはない。しかし、そういった状況でも常に改善の意識を持ち、児童生徒の健全育成に寄与するために研鑽を積む必要があるのは言うまでもない。児童生徒の貴重な学びの時間を奪い取らず、また、多忙を極める教職員に大きな負担をかけることなく定期的・継続的な研修の機会を確保する必要がある。そのためには、短時間で実施できるとともに、児童生徒にとっても教職員にとっても、楽しみながら目的意識と意欲を持って取り組み、その中に諸問題の未然防止の要素や協働的な関わりの重要性を自然と見出せるような「ミニプログラム」が必要不可欠になっている。本授業では、そのことを履修者に理解させるとともに、実際にそのミニプログラムを作成してみ

て検証する活動を取り入れることにした。

二点目は、学内だけに留まる閉鎖的・内向きな授業スタイルからの脱却である。社会に開かれた教育課程は、今次学習指導要領改訂のキーワードであるが、教員養成の大学・学部や教職大学院の授業高等教育においてもそれが喫緊の課題になっている。言い換えれば大学・大学院での学びが学校現場の実態と乖離して、「使いものにならない」という問題である。もちろん、専門的で先進的な理論や知見を学んだり、奥深い追究や実験をしていくことで新たな知が生成されたり、見出されたりすることは重要なことであり、それを学ぶことも重要である。教職大学院の授業での学びは、実際の学校現場で「即」効果を発揮するものにならないと意味がない。そのことを考慮せずに、ただ漫然と児童生徒が関心をもちそうな教材を考えてレポートを作成したり、ICT機器を使っているだけの教材や授業を考えて授業中に発表して終わったり…といった授業内容であれば、その存在意義が疑われる。

やはり大学・大学院の学びが学校現場の現状をリアルに改善したり、課題を克服したりする可能性のあるものを作成し、実際の学校現場に積極的にアピール・貢献していくような学びが必要であると考え。そのことがひいては履修者の資質・能力を高め、戦力として活躍できる人材を育成することにつながる。

そこで本授業では、これまで以上に、実際の学校現場と協働しながら授業を作成するとともにその成果を実際の現場に還元する仕組みを構築し、履修生がより現場目線で授業に臨めるように設定して実施した。

2. 授業評価・授業研究の内容

①授業研究の内容について

今年度も、現在の学校教育現場で問題になっているテーマを取り上げ、合計3つのミニプログラムを協働で作成することにした。その授業の様子と成果を報告する。

【プログラムA】

令和4年10月に文部科学省から発表された「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、不登校は過去最多となり、いじめや暴力行為も増加や低年齢化が加速している。コロナ禍に入り、人間関係を構築する学びの機会を失っていることもこの状況に拍車を懸けていたり、これらの行動には複合的な要因が重なっていたりもするが、いずれにしても、児童生徒の人間関係力やトラブルを未然に防ぐ力を育成することは論を待たないであろう。加えて、教員の対応力や未然防止のための資質・能力の育成も欠かせない。プログラムAでは、上記のような喫緊の課題を解決できる資質を育成し、現場でも実践できる力を育てるために、「人間関係力向上プログラム」の作成と相互検証を行うことにした。

本授業で作成する「人間関係力向上プログラム」は、松山市教育委員会と愛媛大学教職大学院が平成28年度から共同で研究開発を行ったものであり、授業者も研究開始当時からメンバーとして参加し、その作成や運用・推進に携わっている。現在は、教職員の研修プログラム用、児童生徒が実施する場面对応ゲーム用の2種類が作成され、松山市内全小中学校に配布されるとともに活用されている。今回は、このプログラムの追加教材を作成するという目的で実施した。

まず、プログラムの中でも、「ミニプログラム」というものはどういうものか、学校現場の実状に合わせた継続的・質的な視点から、今後の研修の在り方や方向性について確認した後、実際にミニプログラムを取り入れ、教員研修の場で活用されている、愛媛県総合教育センター教育相談室指導主事・富田和宏先生に来学いただき、「教員研修プログラムの在り方についてー県総合教育センター研究事業での取組をとおしてー」というタイトルで、授業をしていただいた。

富田先生からは、実際の適応指導教室の実態や不登校の現状から、愛媛県が取り組んでいる不登校やいじめの対策、ミニプログラムを活用した研修システムの手法などを御講義していただくことができた。実際の現場において、ミニプログラムを実施することの意義や重要性を理解することができ、現場目線でプログラムを作成する意識を高めることがで

きた。



（写真1）ゲスト講師（県総合教育センター指導主事）による事例紹介・講話の様子

続いて、実際に使用されている場面对応ゲームを実際に体験してみたり、その作成意図や運用方法などを確認したりする活動を通して、どのようなプログラムを作成すればよいか理解した上で、1人1つ場面对応ゲームを作成することにした。ここで使用する事例は、なるべく児童生徒の身近で起こり得る場面となるよう、履修生の経験や実習先での実例などをもとに加工して作成させた。履修生は、実際に自分が授業で使用する場面を想定しながら作成を行うことができていた。作成したプログラムは、相互に発表し合い、ブラッシュアップして提出した。通常の授業であれば、ここで終了することとなるが、本授業では、作成したプログラムを実際の現場でも活用してもらえよう、昨年度から松山市教育委員会に追加プログラムとして提供しており、本年度もその方向で働きかけている。実際の現場と大学院の授業が連携することで、現場は新しいプログラムを使った取組ができ

人間関係力向上プログラム（場面对応ゲーム）

事例カテゴリー 【①学校生活】
作成者氏名【藤原 巨輔】

問題例

あなたは小学5年生

あなたはAさん、Bさんと仲良しです。最近AさんとBさんは、授業中に私語をして周りの友達に迷惑をかけています。ある日、AさんとBさんに「友達だから裏切らないよな！」と授業中にゲームの話しようと言われました。あなたは授業中にAさん、Bさんと話をしますか？

話す → YES 黒のカード
話さない → NO 赤のカード

（写真2）実際に履修生が作成した、場面对応ゲームのスライド

るとともに、作成する履修生にとっては、緊張感やりがいを感じながら、課題作成を行うことができるなど、双方にとってメリットが生じるように授業設計を行っている。

【プログラム B】

2つ目のミニプログラムとして、「ESD／SDGs ミニプログラム」の作成・発表を行った。今次改訂の学習指導要領の前文で、「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられるなど、ESDやSDGsが重要なキーワードとして取り上げられる機会も増えてきたが、実際の学校現場では、何をどのように教えたらいのか分からないという状態に陥っており、その教材開発が喫緊の課題となっている。そこで、児童生徒が自然と探究心を持ち、身の回りにある課題に気づけるような教材を作成し、朝の会などの短い時間で活用できるようにプログラム化することを授業として取り組んだ。

SDGsは現在17の目標があるが今回は履修生が関心を持っているテーマを持ち寄り、児童生徒にとって、どのような内容の教材を用いると効果的かということについて検討を行った。その後、グループで分担してスライド資料として作成し、発表したものを相互検証した。履修生は、社会科や総合的な学習の時間でよく扱われる環境問題や気候変動問題だけでなく、ジェンダーや不平等や公正な社会の実現など、学校現場でこれから課題となっていくであろうホットなテーマについて取り上げ、教材として作成していた。また、児童生徒の興味・関心を惹きつけるような内容に仕上げ、SDGsやESDの学びの導入やきっかけとして十分使用できるものを作成することができていた。



（写真3）実際に履修生が作成した、SDGs ミニプログラムのスライド

【プログラム C】

3つ目のプログラムとして、「同僚性向上（人間関係構築）プログラム【教員組織対象】」の作成とワークショップ・演習を行った。現在、教員の働き方改革が叫ばれ、多様な取組が始まっているが、時短や負担軽減の話ばかりで、教員としての質の向上が働き方改革につながることや協働して取り組むことの重要性を取り上げる機会が少ない。特に、チーム学校という言葉だけが独り歩きし、実際の学校現場では、互いが連携できるような雰囲気づくりを実施しているところがそれほど多くないという現状がある。職員間の同僚性を構築し、互いの個性や良さを発揮できる職場環境を整えることで、様々な教育的課題に協働連携して向き合えるようになる。

そこで、本授業では、まず履修生同士でその現状について実習先や自校の現場の様子から感じることを話し合う機会を持ち、職場環境を改善し、同僚性を高められるようなミニプログラムを作成した。具体的には30分程度のミニ研修を3回行う中で、教員同士の連帯感や一体感を生み、なおかつ参加して得をする、ためになるような「参加したくなるミニ研修プログラム」を作成することを求めた。また、作成した研修プログラムは、体験的に紹介するワークショップ・演習形式の時間を取り入れ、履修者同士が実際に経験しながら、作成したプログラムの有用性や効果の度合いなどを検証できるように設定した。

写真4・5は、実際の演習の様子である。履修生は、「自分たちが学校現場で勤務することになったら、このような楽しい研修があってほしい」という視点で考えて作成すること



（写真4）プログラムCの研修プログラムを体験している様子（1）

ができていた。また、履修生が7名と少人数であったので、2グループに分かれて発表した。互いに作成したミニ研修プログラムを体験することで、教員の同僚性を高めるために必要なことについて、意識しながら進めることができてきた。



(写真5) プログラムCの研修プログラムを体験している様子(2)

②授業評価について

授業の最後に、履修者による評価を行った。今回は、全15回のうち報告者が担当した後半部分の評価を自由記述形式で実施した。以下は、その回答内容である。

(履修生による評価【自由記述形式】)

○中学校グループの発表では、ベン図を用いた学校の現状について課題やよいところを整理する活動であった。特徴的なのがやはりベン図で、それを用いて整理することによって学校を取り巻いている環境が非常にわかりやすくなったように感じた。授業中にも意見を述べたが、課題の克服・もしくは長所の伸長のためにどのような活動を誰と協力しながら取り組んでいくかをベン図に起こした方が、学校を取り巻く様々な環境とのかかわり合いが見やすくなるのではないかと感じた。しかし、ただ学校の現状を振り返るだけではなく整理することでわかりやすくなる問題が多くなるのではないかと感じた。(現場の教員として働いていないため地域のことまで目を向けられなかった。今後もし学校の課題に相対する際にはぜひ使ってみようと感じた。)

○自分たちの班の発表については、実際の職

場で実施したい内容を3人で話し合っ構成することができた。特に、組織の同僚性として不足していると感じるのが、学校教育目標を共有しての指導である。近年、異動の間隔が短くなっているからこそ、職員同士のことを知り、1つの目標に向かって働く集団となることが大切であると考えた。管理職の視点で考えると、職員の考えを聞き、ボトムアップを図る貴重な機会であると思う。来年以降の自分の立場にもよるが、今回の学びを教育現場で生かしたい。

小学校班の研修は、老若男女問わず行うことができ、自分自身参加をしてとても面白い良い経験になった。掲示物は、中学校に比べて小学校は充実していることが多い。視覚的に訴えることで、落ち着いた学習環境を作ったり、子どものやる気を引き出したり、来校者に啓発したりと、大きな意味があると思う。特別支援の視点からも、掲示物で視覚的に分かりやすくするのは大切である。今回の研修では、短期的な同僚性を高めながら、それが1年間継続し、長期的な同僚性にもつながるのが素晴らしいと感じた。

○生徒対象、教員対象のプログラムを作成しましたが、それぞれのプログラムが生徒と教員両方の学びに繋がっているように感じました。生徒対象のプログラムを行うときは、子どもたちにとって身近なトピックを用いることで、子どもの理解を深め、関心を持たせることができますと思います。学校生活で実際に起こった事例や起こりそうな事例を使って、自分たちの行動を振り返らせたり、未然に問題を防ぐことができるような気がしました。ESD/SDGsのミニプログラムの作成では、私自身がとても興味を持っているため、実際に現場で取り組んでみたいと思いました。そのためにも、まずは自分自身からESD/SDGsに関する学びを深めていきたいです。教員向けの研修は、どの時期に行うかで内容を変えていかなければならないため、企画する段階が最も難しいように感じました。同僚性を高めることは、最終的に学校経営に関わってくると思っているの、研修に頼るだけでなく、日頃から教員集団は1つのチームであることを意識しながら働いていきたいです。

○プログラム作成を通して、学校での学びをESD や SDGs の視点から見つめなおすことができました。今回作成した私のプログラムは「平和と公正をすべての人に」をテーマとして、暴力や法律の有無について考えていくものとなりましたが、本当の意味で児童たちの理解を深めようとするのであれば、子どもたちにとってもっと身近なテーマを扱った方がよかったですのではないかと感じました。いかに自分事として考えさせることができるかが、ESD には必要不可欠な視点だと思います。児童たちが考えを深め、実際に行動に移すことができるような教材をこれからも考えていきたいと思いました。

○同僚性を高めるプログラムを考えていく中で、教師が本音で教育について語り合う場を設けることが必要なのではないかと感じました。実際に中学校・高校生グループのプログラムを通して教員の本音をぶつけ合うことでビジョンを共有することができ、教員同士を知ることにもつながるのではないかと感じました。また、このようなプログラムには、納得感をもって参加できるような仕組みも必要ではないかと感じました。必要性を感じることができるような仕組みや、やってみてよかったですと思える充実感も大切だと考えました。

今回私たちのグループは、「掲示物コンテスト」を提案しましたが、いろいろやってみる中で前段階の計画を練る時間が必要だと感じさせられました。ゴールを明確にして、そのもとで意見交換や交流を図ることで協力関係を築くことや、関わりやすい雰囲気を作ることができると感じました。また、ルールや班分けの仕方などまだまだ改善できるところもあると思うのでさらに練っていき、実際にどこかの場面で実践したいと感じました。

○中学校班の研修を実際に体験して、教育目標が常に書いてあるので、目標に沿って話を進めることができたと思う。いろいろな立場から本音の話を聞くことができるので、とても面白いと感じた。また、自分たちの掲示の製作に関しても、同じグループになった人との役割分担や少しの雑談など教員の関係を深めるものとしてありだなと感じた。また、

掲示の製作をしたことがない人も、上手な人の技術やコツを学ぶいい機会になるので、若手にとってチャンスになると思う。研修に対して、前向きでない人も多いと思うが、内容を工夫して参加して良かったと思えるものになれば教員の質や教員同士の関係も向上されるのではないかと感じた。

記述の中で下線・太字に示したように、実際の学校現場で使ってみたい、活用したい、と述べる履修生が多くいた。本授業で扱った内容が、現場のニーズや課題を取り上げたものであり、且つ内容が「使えそうなもの」であったかたであろう。大学院の学びが現場とリンクするには、常に学校の「今」を授業者が見つめ、その期待に応えるような内容を取り上げなければならない。今回は、その一端が担えたのではないかと感じている。

その一方、本授業の課題も多いと感じている。ミニプログラムは実際に学校に通う子どもたち自身が体験したり、実際に忙しい中働いている教員に実施してもらったりしたのもではないため、本当に効果があるのかを見極める必要がある。大学院の授業すべてが、実際の学校現場で検証できるわけではないが、実務家教員が実施する授業である以上、常に現場と連携しながら、「現場目線のよりよい授業づくり」を追究していきたい。